

エンカウンター（ENCOUNTER）

第 108 号

平成 23 年 4 月 20 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960

<http://encounter.agape.gr.jp/>

相沢良一

「黒潮の神学 下巻」(黒潮社)より(11)

五つの袋を語る

母の日にちなんで、三つの袋を大事にという言葉に出会った。その三つの袋とはお袋と胃袋と堪忍袋であった。

母がなくなってから、20 数年になる。79 歳だった。老衰で平安な最後であった。母とは、大島で 14 年間一緒に暮らした。...

生まれてこの方、酒を飲んだこともなければ、タバコを喫ったこともないので胃は大事にされてきたものの、熱いものが好き、甘いものが好きだったので、そのまま推移すれば、ガンになる危険性があったかもしれないが、玄米自然食にしてからは胃の存在を感じなくなった。

堪忍袋のほうは、ようやくにして切れなくなった。孔子さまは、「60 にして耳順う」と言われたが、こちらは孔子さまより 10 年おくれた。この年になると、亀の甲より年の功と言うべきか。この袋を切ったら、牧師は勤まらない。切らないだけではなく、この袋で包まなければならないのである。

コリント人への第 1 の手紙第 13 章は、「愛の讃歌」として、人口

に膾炙されている個所である。その中で使徒パウロは、

「愛は寛容であり、愛は情け深い。また、ねたむことをしない。愛は高ぶらない。誇らない。不作法をしない。自分の利益を求めない。いらだたない。恨みをいだかない。不義を喜ばないで真理を尊ぶ。そしてすべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを耐える」(4-6節)

と述べた。これにまさる愛の定義はない。...

自分にとっては、これら 3 つの袋に、さらに手提袋を付け加えなければならない。どこに行くにも、訪問をするにも、家庭集会に出かけるにも、郵便局に行くにも、わが手から離せないのが手提袋である。この手提げ袋がなければ、わが「黒潮」の配達もできないのである。「腹に一物、手に荷物」とあるが、このごろは旅に出るさいにも、旅行鞆と一緒にこの手提袋を持参することにしている。これで手に二物(荷物)となる。網棚に乗せた重い旅行鞆をおろして、その中から本や読書用の眼鏡を取り出すのは、少なからざる時間と手間がかかる。手提袋の中に、聖書と本と眼鏡と、それに一日 4 回は差さなければならない緑内障のための目薬を入れておけば、混雑した車中で釣り皮につかまっても、すぐ本を取り出して読むことができるし、目薬もすぐ差せる。

詩篇第 56 篇に「わたしの涙をあなたの皮袋にたくわえてください」(8節)という美しい祈りの詩がある。文語訳のほうでは、「なんじの革袋にわが涙をたくわえたまへ」となっているが、この「たくはえたまへ」は「たくはへたまへり」と解するほうが、より適切であるとされる。

愛する者の死のために流す涙、苦しみ悲しめる者のために注ぐ涙、さらには、わが罪のために、過失のために、挫折のために、わが内に溢れ出る涙は、神の皮袋にたくわえられているのである。

われわれの涙は決してむなしくはないのである。神は、そのような涙を、ご自身の記憶の中に留めてくださる。神の皮袋にわれわれの涙がたくわえられているがゆえに、そこに、われわれの慰めがあり、喜びがあり、救いがあるのである。

(87・3)

心の目を明らかに

…(緑内障の)手術の時期も良かったようで、さいわいにして一眼は取りとめることができ、限界ぎりぎりと言われた右眼の視野も、手術時の現状を維持し、なんとか今日に至った次第である。

「イエスが道を通っておられるとき、生まれつきの盲人を見られた。弟子たちはイエスに尋ねて言った、『先生、この人が生まれつき盲人なのは、だれが罪を犯したためですか。本人ですか、それともその両親ですか』。イエスは答えられた、『本人が罪を犯したのでもなく、また、その両親が犯したのでもない。ただ神のみわざが、彼の上に現われるためである。わたしたちは、わたしをつかわされたかたのわざを、昼の間にしなければならない。夜が来る。すると、だれも働けなくなる。わたしは、この世にいる間は、世の光である。』イエスは、そう言って、地につばきをし、そのつばきで、どろをつくり、そのどろを盲人の目に塗って言われた、『シロアム(つかわされた者、の意)の池に行って洗いなさい』。そこで彼は行って洗った。そして見えるようになって帰って行った」(ヨハネ福音書9章1-9節)

この「シロアムの池」の物語は、失明された多くの人々を、どれだけ慰め、励まし、奮い立たせ、生きる力を与えてきたことであろうか。

「すべての人を照らすまことの光があつて世にきた。彼は世にいた。そして世は彼によってできたのであるが、世は彼を知らずにいた。彼は自分のところにきたのに、自分の民は彼を受け入れなかった。しかし、彼を受け入れた者、すなわち、その名を信じた人々には、彼は神の子となる力を与えたのである。それらの人は血すじによらず、肉の欲によらず、また、人の欲にもよらず、ただ神によって生まれたのである」(ヨハネ福音書第1章9-13節)

このヨハネ福音書の序文の最も適切な伝道説教が、この「シロアムの池」、すなわち、盲人開眼の物語であったのである。

(96・10)

第7講 終末論

わが子を天に送って

実(みのる)が天に召されたのは、(昭和57年)12月26日午前10時14分でした。亡くなる前々日に家内がついに風邪で倒れ、私も体の工合が悪かったのと、クリスマスの多忙で、実が発熱して苦しんでいるのにも、じゅうぶんな看護のできなかつたことが唯一の心残りでもありました。

あの時にはああすれば良かった、こうしてあげれば良かったと思うのですが、いかにあせっても、もがいても、人間の生と死とはただ神のみ手の内にのみあることを思い、私はその晩、発送するばかりにしていた年賀状を取り出すと、実の遺がいの傍で、実の死亡だけを簡単に書き添えました。涙が溢れでてきては、眼鏡を何度も取りはずすのでした。新年にかけて、多くの方々からほんとうに温かいお慰めのお便りを頂き、身にしみて有難く拝見をいたしました。

勤(つとむ)の時と違って、この子は脳性麻痺に冒されたため、生まれてから死ぬまで気分の良かった日は一日もなかったと言ってよいほどでした。...

10年前に勤を亡くし、今また実を亡くし、不甲斐ない親だと痛感しております。村の人たちが家内に「奥さん、授からないなあ」と慰めてくれましたが、まことに「主与え、主取りたもうなり」であります。私は実を天に送ったことによって、いよいよ堅く天国への希望、来世への期待を深められました。

実を亡くしたことによって、私を与えられたみことばは、

「...凡ての懲戒、今は喜ばしと見えず、反って悲しと見ゆ、されど後これに由りて練習する者に、義の平安なる果を結ばしむ。されば衰へたる手、弱りたる膝を強くし、足蹇へたる者の履み外すことなく、反って医されんために汝らの足に直なる途を備へよ」(ヘブル書12の5-13)

でありました。...

(58・2)

春立ちぬ、いざ生きめやも

厳寒の中にあっても、立春の声を聞くと、そこはかたなく「春、遠からじ」の思いに満たされます。「風立ちぬ、いざ生きめやも」。これはフランスの詩人、ポール・ヴァレリーの詩の一節ですが、われわれの人生も厳しい試練の冬に遭遇して、はじめて「いざ、生きめやも」と叫ばざるを得ないのではないかと、思うのです。...

Mさんは、結婚後10年目に与えられた最愛のお子さんを16歳で、たった一日の病いで亡くされ、「なぜこのようなことが、わが身に起きたのであるか」と、涙を流して神に訴えざるを得なかったのです。まさに、それは厳寒の冬であったわけです。

「なぜかは答えにくくても『すべてのこと相働きて益となることを、キリスト者は知っている』と、書きました。そしてその後

「死も生も、天使も支配者も、現在のものも将来のものも、力あるものも、高いものも深いものも、その他どんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにおける神の愛から、わたしたちを引き離すことは出来ないのである」とロマ書第8章38節を引用しておいたのです。奇しくも前号の短い拙文が、このお母さんに対するご返事になったとも思えるのです。

きびしい人生の冬の寒さで、身も心も冷え切ってしまうような時に、私たちの心を温め「いざ生きめやも」と生きる望みと力を与えるものは、聖書のみことば以外にはありません。

ヨハネ第1の手紙4章16節に

「わたしたちは、神がわたしたちに対して持っておられる愛を知り、かつ信じている。神は愛である」

と記されています。そうです。神は愛です。Mさんが手中の珠を奪われても「神は愛なり」です。...神が、このわたしに対して持っておられる愛をしり、かつ信じている。これがキリスト者なのです。どんな不幸におそわれどのような逆境の中に落ち込んでも、キリスト者は神の愛を疑うことはできないのです。 (66・2)

キリストの手紙

使徒パウロは、コリント教会にあてた手紙の中で

「あなたがたは自分自身が、わたしたちから送られたキリストの手紙であって、墨によらず生ける神の霊によって書かれ、石の板にではなく人の心の板に書かれたものであることを、はっきりとあらわしている」(第2コリント第3章3節)と述べた。...

(福井県大野教会の谷口牧師夫人からの手紙(「黒潮」を幼稚園の教師のテキストとして用い、昨年5月に一人の幼稚園教師が受洗した)と、宇部緑橋教会の陣内牧師よりの手紙(教会員末永米一兄は、「黒潮」を毎月10部ずつ利用されていたが昨年突然の病のため88歳の生涯を閉じられたが、末永氏の女婿晋氏が、米一氏の葬儀をきっかけに礼拝に出席するようになり、元旦に洗礼を受けられた)を紹介した後)

コリント教会の信徒たちが、使徒パウロから送られたキリストの手紙であるように、われわれもまた、それぞれの教会から送られたキリストの手紙なのである。このわたし自身がどのような生き方をし、どのような信仰生活を送るかによって、キリストご自身が多くの人々に配られているからである。

「私たちは神の作品であって、良い行いをするように、キリスト・イエスにあって造られたのである。神は、わたしたちが、良い行いをして日を過ごすようにと、あらかじめ備えて下さったのである」(エペソ書第2章10節)

われわれがキリストの手紙であることは、大きな光栄であると同時に、重い責任をも与えられているのである。

大野教会の谷口牧師夫人から、また宇部緑橋教会の陣内牧師よりいただいたお便りにより、筆者はどんなにか励まされ、慰められたことであつたらうか。お互いわが身をもって、このようなキリストの手紙を認めることのできる者とせられたいのである。(74・2)

この一日を永遠に

いまは亡き雨宮育造氏と奥さんの淑子さんの共著になる『この一日を永遠に がん闘病ホスピス日記』を3日間かけて読み終わったとき、熱いものがこみあげてきた。...

82年4月、浜松にある聖隷ホスピスに入院。数カ月と言われていたのが、奇跡的に1年4カ月点滴だけで命をつなぎ、83年8月56歳で天に召された。この1年4ヶ月のあいだ、雨宮さんは「みことばを伝えるために一日も長く生きていたい」、「今こうして生かされているのは、みことばの宣教のためである」と、絶えず言われたそうだ。

...

この雨宮さんの遺言の最期のことばは、次のようになっている。「人の命は有限であっても、愛は永遠であり、み霊による生命は永遠です。この故に、神に感謝を捧げます。二人の生命は一体であり、永遠です。喜んで神の招きに応じ、天国の門をめざしたいと願っています」。

二人の生命は一体であり、というのは奥さんのことで、この遺言の前半には、「クリスチャンと結婚したいという、神さまはその最大の希望をかなえてくださり、ママと結婚できたことを、わたしは今でもいちばん喜んでおり、また、いちばん誇りに思っております」という奥さんに対する感謝の言葉が述べられている。この本はガンで打ちのめされている人々に、生と死に対する希望を与えると共に、われわれを奮い立たしむる力を有しているのである。

聖隷ホスピス所長の原先生は、「雨宮氏はすばらしいクリスチャンで、終始私共が学ぶところが多く、見舞いに行った者たちがかえって励まされ、また、他の入院患者たちを励まして下さった」とも書いておられる。死を目前に控えて、これだけの生を生きてこられた雨宮さんのことを思えば、われわれもやらなければと思う。福音の宣教のために!! キリストの証しのために!!〔キリスト新聞社刊、定価1700円〕

(84・8)

使徒的宣教の根拠

「...わたしが最も大事なこととしてあなたがたに伝えたのは、わたし自身も受けたことであった。すなわち、キリストが、聖書に書いてあるとおり、わたしたちの罪のために死んだこと、そして葬られたこと、聖書に書いてあるとおり、三日目によみがえったこと、ケパに現れ、次に 12 人に現れたことである。そののち、500 人以上の兄弟たちに、同時に現れた。その中にはすでに眠った者たちもいるが、大多数はいまなお存在している。そののちヤコブに現れ、次に、すべての使徒たちに現れ、そして最後に、いわば、月足らずに生まれたようなわたしにも現れたのである。...」(第 1 コリント 15 章 1 - 19 節)

このコリント人への手紙第 15 章は、使徒パウロによるキリストの復活の論証として引用される個所であります。パウロはここで、教会の伝承と福音宣教の内容についてふれております。その第 1 はキリストの十字架の出来事、第 2 はキリストの復活、第 3 はキリストの顕現であります。...

私は子供の頃、死の怖れを感じました。死んだらどうなるのか、非常な不安に陥ったのでした。...いっしょうけんめいに祈っていたわたしの心に、聖書のみことばが与えられました。それは日曜学校で学び、記憶していたヨハネ福音書第 11 章 25 節でした。

「私はよみがえりであり、命である。わたしを信じる者は、たとえ死んでも生きる。また、生きていて、わたしを信じる者は、いつまでも死なない。

あなたはこれを信じるか」

でした。当時は文語訳でした。子供ながらに、わたしは真剣な気持ちで「信じます」と答えました。その時から死の不安は一掃されました。4 年間中国の戦場におりましたが、死に対する特別な恐怖はありませんでした。...

死に対するむつかしいことは、いまでもよくは分からないのですが、ただ復活の主イエス・キリストのこのおことばを信じており、このおことばに従っておるだけであります。 (86・2)

死の理解とその克服

拝復、...戦地にありましては、輜重第3連帯の中隊長として、われわれ部下の隊員に温情をもって接せられ、わが中隊の者たちよりいかに敬愛されておられたか、沢山の懐かしい思い出が甦って参りました。...

ご質問の靈魂不滅というのは、これはギリシャの宗教思想であって、わたしたちは靈魂の不滅ではなく、体の復活と永遠のいのちを信じているのであります。からだの復活という場合、これは地上のこのままの身体がよみがえるのではなくて、聖書においては、地上の衣を脱ぎ捨て、天の衣を着るといふ風に表現をいたしております。

使徒パウロは「からだのあがなわれることを待ち望んでいる」(ロマ書8の23)と申しましたが、わたしたちは、地上のこの古いからだが滅びたのちに、新しいからだの創造を信じております。したがって、死後は心身共に消失して、何も残らないというふうには、聖書は教えておりません。

次に「永遠のいのち」という場合、永遠とは無限につづくというのではなくして、神との交わりにあずかることを、聖書では「永遠のいのち」と称しているのであります。この意味において、永遠のいのちとは、死後に与えられるものではなくして、いま、この時に、わたしたちは、主イエス・キリストを信じる信仰によって、この永遠のいのちを与えられているのです。「永遠のいのちとは、唯一のまことの神でいますあなたと、また、あなたがつかわされたイエス・キリストとを知ることです」(ヨハネ福音書17の3)。このことばこそ、初代教会の信仰の告白であったのであります。...

ご芳書の中に「他に心底このような死の問題を相談する方もなく、一筆認めました」とございましたが、かかるときに、「黒潮」を通して、小生をお憶えいただき、心より光栄に存じおります。ご健康ご平安を祈り申し上げます。

(86・9)

ちょっぴりの信仰

この（平成4年）2月25日、金田福一先生がみ国に移された。先生の訃報に接し取り急ぎお留守宅に電話を入れる。サト子夫人に「先生は信仰の勇者でした」とお慰めの言葉を述べたところ「主人はただちょっぴり信仰があっただけです」と泰然としておられた。まさに金田先生にして、金田夫人ありき、であった。

金田先生は重い病床にあっても、次々と「家庭霊想集」なるものを書いておられた。その幾篇かを掲載する。

ガンの告知

「死の影の谷を行くときもわたしは災いを恐れない。あなたがたがわたしと共にいて下さる」(詩篇23の4)

「わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいる」(マタイ28の20)

柳田邦男という作家が、ガンで死んだ有名無名の日本人50人あまりを研究したことがあります。そして自分のガンと死を喜んで受容した人の大部分がクリスチャンであったと発表しました。キリストを信じるということは、むつかしいことではありません。「イエスさまが、ガンになっても、死ぬ時も、いつも共にいて下さる」。それだけです。(92.2.1朝)

新ちゃんの召天

愛媛県のある町に中学校長の一家がおられました。夫人はクリスチャンで、ひとり息子の新ちゃんはポリオで、17歳で召天しました。危篤になって、家族と親戚が集まっている所に、教会の長老が訪ねてきました。彼は新ちゃんの枕許に来るなり、「新ちゃん。死ぬことはちっとも、こわいことないけん！ エス様が連れてって下さるから！」と叫びました。すると新ちゃんがニッコリ笑いました。その笑顔を遺して新ちゃんは召天しました。みんなびっくりしました。死はタブーであった町なのでした。老校長はその時「これは仏教にはない！」と感じました。そしてキリストを信じました。(2・1深夜)

このように、金田福一先生にとっては、ペンは、ガンよりも死よりも強かったのである。 (92・3)